



「ことば」という大海に船出して ～ことばの不思議は永遠の謎です～

ことばと付き合うそもそものきっかけは、3歳のとき父の転職に伴い一家で東京から東北の町に移住したこと。近所の女の子たちが誘いに来てくれるのに、何を言っているのか全くわからない、あの不思議な感覚、今でもはっきり覚えています。大きさに言うときあとき他者と自己の違いに目覚めたのかもしれない。

性格が適当なのかあつという間に適応してしまい、小学校の頃は友達とわざと方言だけを使う運動！なんてことまでやっていたほどです。でも家に帰ると東京ことばの生活。友達が家に来ると恥ずかしかった。

やがて変わったことばが勉強したくて東欧に憧れるようになり、大学ではロシア語を専攻。しかしそのうちに、特定のことばをマスターするだけでなく、ことばそのものの不思議や、ことばに取り組む人たちの世界にすっかり引きずり込まれてしまいました。中でも、方言研究の世界がとくに魅力的に思えたのは、多分幼児体験のせいでしょう。それで、回り道だけれども言語学を一からやり直し、それから東欧に行くことにして、大学院は言語学が専門の課程に進学しました。

ことばを理解することで広がる世界 小さな違いから解ける謎

大学院では机に向かう時間より、歩き回って足で稼ぐ研究生活。大半を東北の村や南の島で過ごしました。ことばを理解すると、それまで知らなかった世界が開けるような喜びが大きくて、ますます抜け出せなくなりました。ことばが入り口になって、食べ物や飲み物の味が変わったり、天候や風景による気持ちの変化が納得できたり、「感覚」が単なる想像でなく実感として共有できるような、そんな感じ。もちろん地元の人々からすれば錯覚でしかないでしょうが。

本学では専門のほかに語学教育も担当しています。今の大学教育で語学の習得、とくに英語以外の外国語学習に意義があるのか、いろいろ難しい問題があって、転機に来ているとは思いますが、教室ではこういう自分の体験が学生たちに伝われば、と思って努力しています。最近の学生はどちらかというの内向

きの傾向が強いので、少しでも普段体験できない刺激になれば、と思うのですが。

現在担当している社会学部の講義でも、社会科学でよく取り上げられる言語の問題、すなわち言語と民族アイデンティティであるとか、ナショナリズムなどの問題に行く前に、ことばそのものの仕組みをまず知ってほしいという願いから、最初は人間が駆使する音の不思議を取り上げることにしています。言語を理解するには言語音の理解が基本ですから。そこからわかることは、言語には言語のルールがあるということです。例えば、日本本土のことばと沖縄方言との関係を例にしてみましょう。言語独自の世界で見れば、両者の系統的つながりは明らかで、両者がもとはひとつの言葉から派生したことを誰も疑うことはできません。そして、そこではどちらが優位だとか、一方が他方を支配しているとかいうことは無関係。それらの要素はすべて人間の側、社会の側の都合です。私の仕事はまず材料の姿を示すことで、あとは学生たちが自分の体験や勉強によってそれぞれの見方を確立していけばよいと思うのです。

ことばが同じだから同じ民族であるとか、逆にことばが違うから違う民族だとかいうような言説も、人間・社会の側の都合で決まることであって、ことばが決めているわけではない、ことばの世界にいと当然の理屈ですが、社会の都合に言語が振り回される現実を目の当たりにして、そのあたりを若い世代にわかって欲しいと願うようになりました。それは私が旧ユーゴスラヴィアと深くかかわってきたからだと思います。

ことばがわかるからこそその悲しみ 希望と落胆の両方を味わった

私がまず留学したのは1970年代終わり頃の旧ユーゴスラヴィア。その頃のユーゴスラヴィアは東西対立の狭間で独自の社会主義を営み、特異な位置にありました。当時は経済も表面的には安定し、平和で自由で、そして何より文化の多様性がお国自慢という、日本のような国から行くと、理想の世界のようでした。方言学の先生について調査に連れて行ってもらったり、自分で企画・実行し

たり、ことばを入り口とする異文化体験を満喫しました。研究会で、いろいろな民族の研究者が皆それぞれ自分のことばで自由に議論し合う様が印象に残っています。

しかし、1980年代の終わり頃から次第にさまざまな矛盾が表面化し始め、遂には皆さんがご存知の悲惨な状況にまで至ってしまいます。今日では当時の諸勢力のプロパガンダや世論操作、メディアの役割などがかなり明らかになってきていますが、その頃の落胆はとても深いものでした。人間の都合が優先し、そしてあれほど自由闊達に議論した仲間たちが、あっという間に「敵」同士になってしまった。黒煙の上がる町の様子以上にショックでした。自分が拠り所にしてきた「客観」とは一体何だったのだろうか、と。

まやかに翻弄されず、 ことばそのものから 社会全体を見つめる

このときの体験は辛かったけれども、自分がすべき仕事を見つめなおすきっかけになりました。ユーゴスラヴィアも現在ではかなり落ち着いてきましたので、方言研究の環境も復活しつつありますが、今度は自分のほうが問題で、フィールドに出かける時間がなかなか自由になりません。目下研究作業の多くを費やしているのは、奄美諸島のひとつ、徳之島方言の記録を残すこと。これは学生時代の研究の延長で、昔の仲間と共同で取り組んでいるのですが、過疎化がますます進んでいる現状を見て、大切な記録作りを誰かがしなければと強く思ったのです。去年は文の記録を成果のひとつとして発表することができました。方言による表現の豊かさを見ていると、多様な視点の存在こそが人間の築いた文化の生命力の源泉ではないか、言語が教えているのはそのことなのではないかと、思えるのです。ことばの世界は、一度大海に船出してしまったら簡単には抜け出せません。



社会学研究科教授

中島由美

Yumi Nakajima

幼少期から思春期までを青森県弘前市で過ごし、通じない言葉を実験することで方言や言語に興味を持つ。東京外国語大学でロシア語を専攻後、東京大学大学院で言語学を専攻。方言研究の対象としてスラヴ語および、日本語の諸方言に取り組む。日本で数少ないセルビア・クロアチア語やマケドニア語の研究者でもある。



旧ユーゴスラヴィアから独立した小国マケドニアの教会の祭壇を飾る木彫レリーフ。伝統的な一本彫りの技法が用いられている。